

清流の魚類相と水棲環境

Fresh-Water Fish Aspect and the Aquatic Environment of the Noble Lineage

岩崎行伸

魚は、地球上の水のあるところなら、殆どのところに生息しているといっても過言ではない。海や川・湖・池はもちろんであるが、強い酸性の湖にもウグイが泳いでいる。テラピアの仲間等は水温 45 度以上の湯の中でも生息できるという。これほど極端ではないが、川に棲んでいる魚と一口に言っても、その生息環境はさまざまである。

淡水魚とは：川は上流から海に注いでいるが、河口で水の性質が複雑に変動している。川の水と海の水が混合し合い、水温の変動も大きく、潮の干満によって塩分濃度もさまざまに変化するからである。このような水域を汽水域と言うが、汽水域は魚にとり餌が豊富にある、魅力的な所である。このため、海の魚が入り込んだり、川の魚が降りてきたり、実に賑やかな水域になる。

そこで、淡水魚とはどのようなものかということになるわけであるが、一般的には、一生のうちほんの一時期、一部でも淡水域、汽水域に入る魚を淡水魚として扱う。具体的には、鯉や鮒のように一生淡水域で生活するもの、鮭や鱒のように卵を産むために川に遡上してくるもの、ウナギのように反対に卵を産むため川を下って海に行くもの、マハゼのように河口近くをうろうろする汽水域の魚等、さまざまなグループがある。



図 1-2. 清流・興津川上流域の景観

上流から河口まで：川の上流部は標高が高く、気候が寒冷で水温も低く、渓流で水が大きな岩の間を階段状に流れ、深いよどみや流れの速い瀬が多くあるのが特徴である。このような場所には、イワナ等の北方系の魚が棲んでいる。冷たい水域に棲んでいる魚なので、手で掴んだだけでも、人の体温で焼けどに近いような症状になるという。

イワナの棲む上流からやや下がったあたりでは、ヤマメ・アマゴやウグイ・カワムツ・カマツカ・カジカ等の種類も増えてくる。このあたりでは、広い水面を速く流れる瀬が多くなるので、流れに対して抵抗力のある魚が多くなってくる。山間を抜けたところから流れは緩やかになり、川幅もさらに広がってくる。こうなると水深の深い場所や浅い場所。泥の溜まったところや砂礫、水辺に葦や柳が繁茂したりと、さまざまな水棲環境が混じりあう。水温も徐々に高くなり、流れ込む栄養分により、餌も豊富になる。このような水域には、アブラハヤ・オイカワ・ウグイ等の鯉科の魚やウナギやアユ・カワヨシノボリ・ジュズカケハゼ・シマドジョウ等が認められる。これらの種類は、清流で比較的綺麗で水中の酸素も多い水域でなければ生息できない。

これよりさらに下流に下り、平野部の市街地・住宅地を流れるようになると、水は汚れてくる。このような水域には汚濁や少ない酸素に対して抵抗力のあるマフナ・ナマズ等が代表種になる。都市部を通らず、澄んだ水のまま海へ流れ込む河川では、ウナギやアユも生息し、ハゼ類も多くなる。

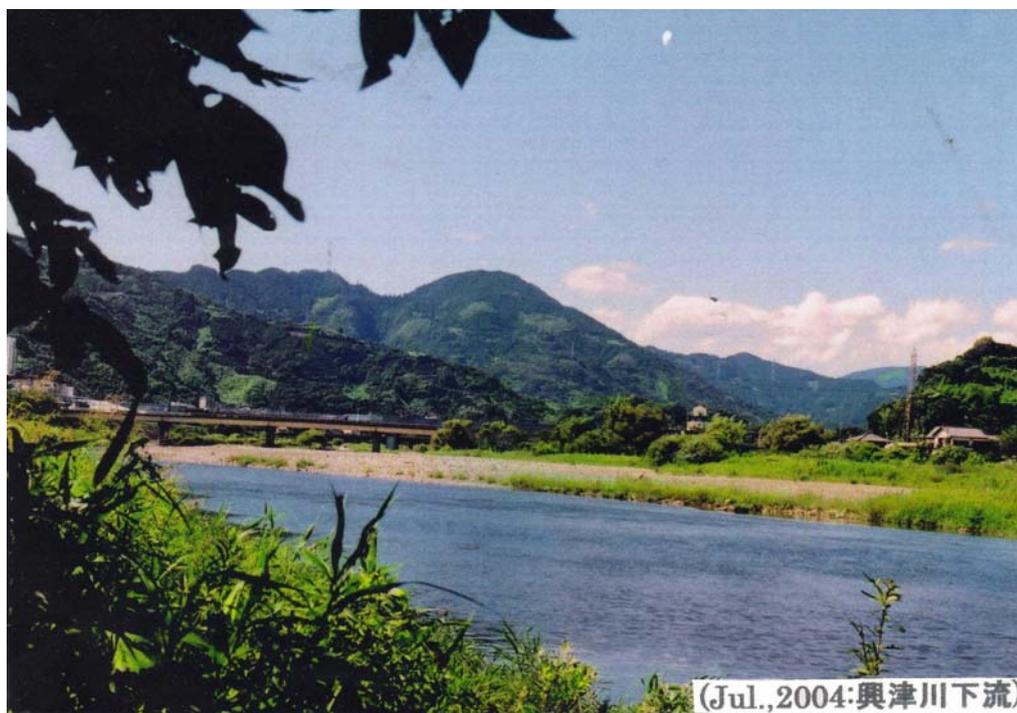


図1. 清流・興津川下流域の景観

河口付近になると、海水と淡水が複雑に混じり合うため、淡水の魚と海の魚が集まり、種類数は大幅に増える。とくに、ヌマチチブ・アユカケ・ゴクラクハゼ・ボウズハゼ・ミミズハゼ・ウキゴリ・マハゼ等のハゼ仲間が多くなる。さらに、ボラスズキ・コノシロ・シロウ

才等、河口や沿岸域をうろうろする周縁性の魚も加わるため、賑やかである。静岡/興津川および庵原川口の春先には、シラスウナギやシロウオが海から溯上してくる。

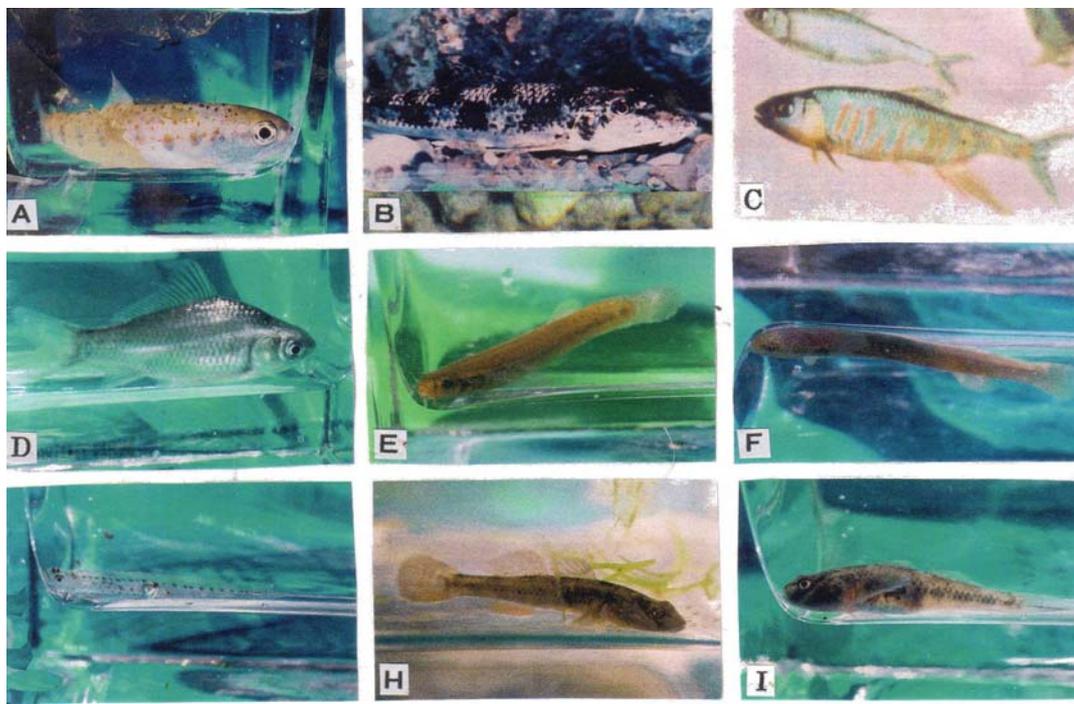


図2. 清流の魚類相：A;アマゴ（吉田川）、B;カマツカ（興津）、C;オイカワ(塩田川)、D;ヘラブナ（麻機遊水池）、E;ホトケドジョウ（興津川）、F;ミミズハゼ（庵原川）G;シロウオ（庵原川）、H;カワヨシノボリ（興津川）、I;シマヨシノボリ（麻機遊水池）(Proto. by Y.Iwasaki)

このような生息状況は、本州の中央部などでよくみられる特徴的な分布状態であり、日本は南北に長い島国で、北海道や九州・沖縄等では様相が違ってくる。北海道では下流域まで水温が低いため、河口付近でもヤマメやオショロコマ（イワナ）がみられるという。九州などでは、イワナは生息せず、上流にヤマメやウグイが生息するという。

参考図書

自然大博物館（1992）：魚貝類、小学館、相賀徹夫編著

日本の淡水魚（2000）フィールドベスト図鑑6、(株)学習研究社、志村 隆編著

川と湖の魚①（2000）：検索入門、(株)保育社、川那部浩哉・水野信彦共著

添付資料

図1. 清流・興津川中流域の景観

図2. 清流・興津川上流域の景観

図3. 清流の魚類相